

その後の「媒体知育」

田悟, 恒雄

(出版者 / Publisher)

法政大学図書館司書課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究

(巻 / Volume)

3

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

25

(発行年 / Year)

2021-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025516>

法政大学図書館司書課程
メディア情報リテラシー研究 第3巻1号、023-025

特集 「鈴木みどりとメディア・リテラシー研究：今日的意義、そしてこれから」
——思い出——

その後の「媒体知育」

田悟恒雄
元リベルタ出版代表

鈴木みどり先生が亡くなって早15年。ご生前すっかりお世話になった元零細出版人ですが、いまでは頭に「元」の字を冠してコロナ禍の憂き世に隠棲しております。というのも、いつまでも回復の兆しの見えない「出版不況」にどうにも抗いきれず、つい3年ほど前に、30年あまり掲げ続けた「Liberta = 自由」の看板を下ろすに至ったからです。もしも先生がご健在でしたら、即「何やってんのよーッ！」と一喝されたに違いありません。

ご逝去の翌春に発行された立命館大学産業社会学会論集「鈴木みどり教授追悼号」では、筆者は「媒体知育事始め」なる雑文を寄せ、この国にメディア・リテラシーの種子を蒔き育てられた先生のご尽力について、一出版人の眼で振り返ってみました。もっとも、一見中国語風の怪しげなタイトルは半ば言葉遊びに過ぎません。このさい誤解のないよう正しておきますと、「メディア・リテラシー」は、台湾では「媒体素養」、大陸中国では「媒介素養」とか「信思素養」とか言うそうです。

ともあれその機会に、カナダ・オンタリオ州教育省編『メディア・リテラシー：マスメディアを読み解く』の翻訳刊行に至る経緯、そこでの鈴木みどり先生はじめ「F C T 市民のテレビの会」（その後の「F C T 市民のメディア・フォーラム」、そして今日の「F C T メディア・リテラシー研究所」と、「F C T 子どものテレビの会」に始まって、実に目まぐるしく名称変更を重ねてきたものですね。本屋としては、増刷のつど訳者名を変更すべきかどうか、思い悩んだ覚えがあります）の果たした役割、刊行後の本の売れ行き等について、詳しくご報告させていただきました。

というわけで、いま改めてご報告すべきことなどあまりないのですが、『Study Guide メディア・リテラシー』の編纂刊行など、その後も旺盛に続けられた先生の疲れを知らない活動を少しでも跡づけることができれば、と思う次第です。

さて、オンタリオ州のリソースガイドを翻訳刊行したのは、1992年11月のことでした。前掲「追悼号」で白状しましたように刊行後3年間は「鳴かず飛ばず」の態でいたこの本も、その後は徐々に息を吹き返し、最終的には8刷を数えるに至っています。

2度目のミレニアムを迎え、旧郵政省「放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会」の報告書が出るのですが、そこではメディア・リテラシーの意義についてこう

書かれています——。「メディア・リテラシーとは、メディアとの関わりが不可欠なメディア社会における『生きる力』であり、多様な価値観をもつ人々から成り立つ民主社会を健全に発展させるために不可欠なものである」と。そして2年後の2002年には、旧文部省が「ゆとり教育」の一環として「総合的な学習の時間」を立ち上げ、そこに「メディア・リテラシー」が導入されたのでした。

この2つの出来事がメディア・リテラシー普及の「追い風」となったことは言うまでもありませんが、その根底には次のような事情がありました——。

「多様なメディアが送り出す種々さまざまな情報がまるで空気のように偏在する『メディア社会』が到来し、そのようなメディア社会を主体的に生きていくためには、メディア・リテラシーの向上が不可欠であるという認識が…広く共有されるようになってきた」（『Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』「まえがき」より）。

こうして年々高まる気運と時代の要請に応えようと、2000年8月には、日本のメディア状況に即した『Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』が編まれ、3年後の4月には、その姉妹編として『Study Guide メディア・リテラシー【ジェンダー編】』が加わります。

これらの制作には、立命館大学の「メディア・リテラシー研究プロジェクト」とNPO法人の「FCT市民のメディア・フォーラム」が共同して、両者が長年積み重ねてきた研究と実践を持ち寄り、議論と修正を加えながら原稿を形にしてゆきました。アカデミズムと在野の市民活動とのこのような連携を可能にしたのはやはり、双方に深くコミットされてきた鈴木みどり先生あつてのことでした。

【入門編】と【ジェンダー編】2つの『Study Guide メディア・リテラシー』は教育現場にとどまらず、各地で開かれる市民講座でも広く活用されました。なかでも特筆すべきは、FCTが毎年神奈川県・江の島などで開催していた研修セミナーです。そこには全国各地の大学や中高校でメディア・リテラシーに取り組んでいる教育関係者、地域の生涯学習の企画に携わる自治体関係者、そしてそれらの講座やワークショップの講師やファシリテーターを務める市民組織関係者ら多彩な人々が参加、セミナー終了後には参加者全員にファイル入りの立派な「修了証」が授与されました。

こうした数多くの実践の成果を踏まえ、2004年12月には、初版を大幅に改訂した『新版 Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』が出されます。この版は基本的には初版の構成を踏襲しながら全体に加筆、いっそう丁寧な説明を加えるとともに、わかりにくかった箇所を書き改めました。とりわけ第4章「ドラマと私たちの世界」、第5章「ニュース報道を読み解く」では、内容を一新しています。

また新版【入門編】では、先行の【ジェンダー編】との相互関連を図るとともに、1996年に立ち上げられたインターネットサイト「メディア・リテラシーの世界」(Media Literacy Project in Japan; <http://mlpj.org/>)との関係も強めています。

そして2013年4月、本格的なネットの時代を見据えて【入門編】はさらに大改訂され、新たに第6章「インターネットを読み解く」を加え、『最新 Study Guide メディア・リテラシー【入

門編』』として結実したのです。鈴木みどり先生が亡くなって7年もしてからの「最新版」ですが、「日本におけるメディア・リテラシー普及のモニュメント」として、編者名に先生のお名前を掲げ続けさせていただきました。